途中で終わってしまったら事業が難しいという意見もあげられ、「歴史があってつなげていくもの」であるということが述べられた。

新人は、現在の新人研修だけでは覚えきれず、研修を終えてもわからないことが多いため、先輩協力員に何度も同じことを聞いてしまうことに申し訳なさを感じているという発言があり、新人研修だけでは難しい状況を述べている。

<ベテラン>

・一番やっぱりこう皆さんに気になるのが新しい方を指導するとか、そういう時に教えてるつもりが何かこうきつく言ってるっていうのがとられるっていうか、私たち先輩でいるほうは「あっ、これも教えてこれも教えて」っていうのがやっぱり言葉としてきつく向こうにとられるとか、そういう何か全体がそんなあの１番にそこの中で色々問題っていうのがそれだと思うんですよ。教え方、言葉とかにものすごい気をつけなくちゃいけないんだなっていう。一生懸命やってるつもりが逆に取られてるっていうのがあって、で今思えば何かそういうことが一番大切っていうか。気持ちはあるのに何か逆に取られるっていうことがすごい寂しくて。うん、だから言葉の使い方とか指導の仕方ってすごい、何か指導とかって研修って大切なんだろうなっていう。だから家族で何か言ってても、やっぱりきつく感じるって言う時もありますよね、その人の気持ちがふさいでる時に言った言葉がとかいう。何かそれがすごい何かそれを乗り越えてくれたら、分かってくれると何か「ああ、良かった。この人に色々教えて良かった」とかなるし、だからそこは一番言葉の使い方とかその接し方に気を遣うっていうか。最初はそんな感じなかったんですけどだんだん長くいて、すぐ辞める方とかいると「あっ、何か言い過ぎたかな」とか何か気を悪くしたのかなとかすごい気を遣うようになりましたね。だからその人との接し方が一番こう大切かなって。どういう風に接すればいいかとか感じるようになりましたね。

・仕事の出来る人を固めたくなるんですよね。仕事がまわらないじゃありませんか。それでも、育たないじゃないですか。だから、そこら辺をもう少し、どういう目で見てくれるのかなっていうのを、やっぱり、知りたいかなって。その人によって育ち方が違う。住民参加型っていって断れない状況のものですよね。事務局はどういうふうに考えているのか、現場で働くわけではないわけだから、実際に動きってわからないですよね。私は事務局は絶対入ってもらいたいです、一度。

・増やしてくれればもうちょっと気持ちの余裕も出来て、優しくもなれるじゃないですか。そのときは怒鳴り合いになっちゃいますよ。間に合わなければ、おおいたてますもの。そうすると、言われる人はやっぱり傷つく、人によっては受け方が傷つく人もいるんですよ。傷つけたいわけじゃないんですよ。でも、あの人はいじわるだってなっちゃうじゃないですか。だから、そ

ういうのを凄くやっぱり、こう避けたいかなって、一緒に働く現場としては。

・私たちの頃はほら研修って本当になかったんでね。もう入ったその日からそのもう、はいっていう感じでやってきたから。うん、私はそれでも大丈夫だった、大丈夫な人と大丈夫じゃない人がいるんですよね、やっぱり人間だから。だからうーん、もうちょっと余裕、時間的に余裕があれば、何か全て解決できるのかなと思う時もあるしね。

<中堅>

・ちょっと最初は苦しいことがありましたけども、それ乗り越えて何かこう明るい光が見えてきた気がします。各先輩からもそういうお話を伺ってましたけど、あっこれかって。あっこれだっという感じで乗り越えてきました。
何回聞いてもこう親切にフォローがあって乗り越えて来れたっていうところで、今日につながっていると思います。
最初入った時はやはり夢中でがむしゃらすぎましたね。見ててあの覚えなくちゃっていう気持ちと皆さんに迷惑をかけないようにしなくちゃというのがありました。それで結構あっこんなに大変なんだっていうことに続けていかれるかなっていうのは何回かありましたけども、やはり聞けば皆さんとても親切に教えて下さる。見ててあの覚えなくちゃっていう気持ちと皆さんに迷惑をかけないようにしなくちゃというのがありました。それで結構あっこんなに大変なんだっていうことに続けていかれるかなっていうのは何回かありましたけども、やはり聞けば皆さんとても親切に教えて下さる。慣れていくうちに今度は新しい方が入ってらっしゃる時期になりまして、その時に私「私と同じ緊張感とあの、中の人たちはどういう感じなのかなっていう気持ちで入ってらっしゃってるだろうな。」と思うと、やっぱり違いますよね、そこは自分が経験したことだから、この方はもう少し慣れればきっとこの山を越えられるななんて思う時は、自分がこう光を差してきたようなこう明るさが見えた時はそれは楽しさが出てきた時期。だからその時期を乗り越えてほしいなっていう気持ちがすごくありながら活動したのを覚えてますね、
やってるのは楽しいですけれどもその山を乗り越えるのがやはりもう本人がそこに慣れていくことと、やはり覚えていかなければお金を頂いている仕事でありますし、緊張して作らなければこれは利用者さんが召し上がるものだっていうことですよね。そういうことを常に考えてきたように思います。周りの力も絶対必要だと思います、声かけとか。自分が経験してきてあの時期こうだったな、ああだったなっていうのは覚えてますよね。伝える時に、相手のことも考えながらその問題を解決していくっていうことですね。後に続く方もこういうことっていうのがすごく歴史があって私はここが出来てるっていうのを先輩たち見てて思ったんですね。つなげていく

っていう時にやっぱり入ってくる方が途中で終ったらこの事業はなかなか難しいっていうことも考えています。

・本当に人との接し方っていうのが難しくて、私は割とこうきつく言われても何くそっていう方なんですね、割と。だから自分が言ったことで相手がどのように取ってくれてるのかっていうのがすごいものすごい気になる半面、もうしょうがないじゃないか、こういう所ではいろんなことがあるんだからっていう風に私は受け止めちゃう方なんですね。で、やっぱりすごく「人の和」っていうのは難しいなっていうのはものすごく感じますね。何かそれを大切にしていかなくちゃいけないんだけども、やはりここで一緒にお仕事をしましょうっていう方にはある程度は相手がもう少し覚悟を決めてやって欲しいなっていう風に思うことがあるんですね。あのやっぱり遊びじゃないですからね、やっぱりあのやる相手にもし何かあったらっていうのが一番の問題ですよね。だからやっぱり緊張してやるっていうのが一番大切なことだと思うんですね。だからその時にかけた言葉は別に意地悪で言ってる訳でもないし、あの作品を仕上げるのと同じように完璧な物としてお客様の方にお届けしたいっていうのが一番の気持ちですのでね。それが終わったらみんな何もないと思うんですよね。それをやるまでにいろんなことがあっても作品が仕上がればそこでもうゼロの状態になると思うんですね。ですから相手も私たちも両方とも、あのキャッチボールみたいに受け止め続ければいいなっていう風に思うんですね。

・チームワークが上手くいってないと絶対いい仕事が出来ないとずっと思ってまして、あのそれがだんだん慣れてくると、あっ上手くいってるんだなっていうのを感じる時がよくあるんですね。私入りたてに今の研修制度みたいなのが確立していなかったんで、新しい方に教えて頂いたんで何も教えてもらってなくて、いざ正式に入ってみたら分からないことだらけで公社による仕事覚えるまでにものすごく時間がかかったんですけれども、でも今はきちんと教えて下さったので今は新しく入られる方っていうのはすごく良いと思います。それでみんなすごく丁寧に教えてらっしゃって「あっこうだったらみんな仕事に入りやすいんだろうな。」っていう皆さんの指導を見ながらお話を聞いて。

<新人>

・研修で、でも全部でもないんですけど教えて頂くんですけど、それが全部覚えてないんですよ。寝る前なんか忘れちゃう。どれだったかしらどれだったかしらっていつも同じこと聞いてて、本当申し訳ないんですけど、そんな状態であの一生懸命、説明して下さった方には本当申し訳ないんですけれども、そんな感じで私も本当にね、辞めたいなと思った時期がすごくあったんですよ。

7）自分自身の課題（新人）

新人は、自分自身が課題であるという発言が多く、覚えること、足を引っ張らないようにすること、自分のことで精いっぱいで周りがまだ見えない状況であることが述べられた。

・私、自分が課題ですから。まだ周りのことがあまり見えてないので、何が課題かっていうより、自分が課題で。それだけの余裕が自分にないですから。 ・課題は作っているものをメニューを一つずつきちっと把握すること。もうそれが頭に入らないとやはり皆さんの手をわずらわせてしまいますので、自分としての課題はお料理のレシピをよく覚えるということです。計算もしなければいけない。発注もあるってことを伺うと、えー自分でも大丈夫かしらってそういう不安も多少あったりするんですけど。 それはもう大丈夫よってベテランの方もいらっしゃるから大丈夫よって言って、お伺いしておりますので、何とか足を引っ張らないようにって。 ・たくさんありますけども、お料理も覚えなきゃいけないし切り方も覚えなきゃいけないしって色々あるんです。 ・早く覚えたい ・日が浅く、休憩期間が長くてまだよくわからない。

（2）公社に求める課題

1）そもそもの公社の目的・考えが伝わらない

公社は何を考え、どういう方向に向かっているのか、どうしていきたいと考えているのか、本当のところはどうなのか、公社の考えがわからない、伝わらない。

という意見があげられた。そもそもの公社の目的・考え方が伝わってこないということから、その必要性が述べられた。

「節約」という意識について、公社の努力が伝わってこない、そもそも「節約」とは公社が言っていることなのか、誰が言っていることなのか、意見がどこから発したことなのかがいつも不明であるということが、現場が混乱する原因であり、公社の考えがちゃんと伝わり、それがはっきりすれば節約意識も高まり、意欲も高まるという意見があげられた。

運営委員会においてさまざまな話し合いを行ってきたが、公社の考えについての話はしておらず、運営委員会でも公社の考えはおりてこないことがあげられた。

公社の食事担当について、2 年おきに担当者が変わるため、それまで一生懸命築き上げたものがまたゼロになってしまい、協力員との立場が逆転してしまう状況があり、公社とのつながり、引き継ぎの必要性があげられた。また、一緒に作り上げるためには、「お仲間ランナーにお任せ」とするのではなく、公社と協力員が一体化していないといけないという意見が述べられた。

・公社の考え方をはっきり言ってほしいというのはありますね。どういう方向

に向かっているか。

・公社は何をどういうふうにしてほしいんだろうっていうのが、いつも自分の中で課題ですね。本当にお金がないんであれば、節約ということをもっと、こう上の方からおりてきて、裏でないらしいよ、ないらしいよ、じゃあ、節約しよう、節約しようって動くんです、私たちって。公社って本当のところ、どうなんだろうっていうのが、自分の中の課題です、いつでも。公社が本当にそういうふうに言ってるのって。誰が言ってる？お金がないって。なければ、ないって言ってもらえば、私たちも、じゃあ、節約しようよって、みんなで固まれると思うのに。こっちは、そんなことない。いやっ、本当はない。それで、人数がこうだから、一人カット、カット、カット。でも、そこは、食数がこれだから、入れちゃうぞ、とかって。やっぱり、本当に現場の判断が凄く強くって。私には公社の考えがよくわからないですから。そこがはっきりすると、もうちょっと違う道が出てくる、皆の節約意識ももっと高まるだろうし、皆の思い寄っていく意欲ももっと高まるだろうし。

・事務局も変わるじゃありませんか。そうすると、私たちの方がベテランになっちゃうんですよね。そこら辺のやり取りですよね。やっぱり、私たちの方が強くなっちゃったりする部分がある。

・運営委員会で、日頃のこういうトラブルがあったとか、調理に関してこういうことが起きた、それをどうやって改善するかって、そういうのを密に話し合いを毎月のようにしてるんですけども。公社がどう考えてるとかまでそこまでの話には至らないですね。

・意見が事務局からおりてきてるのか、誰かが突っついて言ってるのか、それもイマイチよくわからないんですよね。そこら辺が、何か凄く不透明だと思う。

・運営委員会でも、そういう話が出来る雰囲気をね、公社の方でも作って頂いた方が、私はそういうことをもっと公社に聞いていいって思いますよ。

・職員（事務局）が変わることで経緯がわからないこともあるだろうが、根本的に話が違ってたんじゃないかっていうことがある

・食事担当の方がコロコロかわりますのでね。

・お仲間ランナーていうのは、公社から受託してるんですよね。だから、決めることは運営委員会で決めちゃっていいと思うんですね。前はそれでやってましたので、最初の発足は。それが段々、公社の方がおかしくなってますよね。

・公社とお仲間の関係がわからない。先輩方の精神が伝わっていないということが、もったいない。

・私たちはすごい努力してそれをやっているけど、あのはっきり言って、あの公社が何かその時にも何か「私たちお仲間ランナーさんにお任せ」っていう感じで、あの時間もこうでって、私たちあの運営委員が色々スケジュールを作って、12時半からその8時半から12時半とか、すごい努力したんでね、何か私その今課題って言われると、お

仲間ランナーさんとか食事サービスで、あの食事担当の方がやっぱ2年おきとかよく、変わりますよね、あの担当者が。そうすると、あの一一生懸命何かこうやっと築きあげたものがまたゼロになっちゃうんですよね。だからそこは何か寂しいっていうか何か、もうちょっとこうあの一上にもちあげてくれないかな、っていう課題がある。すごい課題は課題っていうか、あの一調理の方はすごい努力したりこうしてこうしましょうああしましょう、仕入れもこうしましょうってなってるけど、逆に言うと、あの一それを持っていくと職員さんもまた1からですからね。うん。あ一そういう風にしてたんですか、こうだったんですかっていう、そこで何かあのもうちょっとこうあの一繋がりっていうか、あの一引き継ぎが欲しいなっていうすごいそれが感じます、感じました。あのずーっといて職員さん本当に2年おきとかに変わるでしょう。そうすると、これはこういう時期こうしてたんです。と、私たちが説明しないといけない。うーん、だからそれがすごいちょっと。う～ん。何か一緒に作り上げるにはやっぱり、あの一お仲間ランナー食事だけじゃなくて、公社とか事務局その辺が一体化していないとって、というのは思いますね。

・今だと今逆に調理に入ってる人が（職員の）上を行っちゃってるって感じがするね。うん、もうあの長い歴史があって、古い方が、こうこうですこの時はこうしましたよっていうので、教える感じになってるんで、だから公社が主であって欲しいなっていう。

・公社の方が主みたいなところがあるし、お仲間の方が中心みたいなところがあるので、どうなっているのか、私居ても分からない。

2）有償ボランティアの位置づけ・理念が伝わっていない現状―伝えていく必要性

なぜ有償ボランティアなのか、以前は公社の理念を勉強する研修会があったが今は行っていないため、研修会の必要性や、新人の初回面接時には、曜日やお金の説明以上に理念を伝えていくことの必要性があげられた。有償ボランティアの先輩たちの精神を受け継いでいくこと、伝えていくことが重要であるとし、有償ボランティアの位置づけ、公社の理念について、公社として説明していってほしいという意見があげられた。

・公社としての説明をもっとあってしかるべきだと思うんですね。有償ボランティアっていうものの位置づけみたいなね。公社が、先輩たちの精神を受け継いでいってほしい。

・前はそういうお勉強会がありましたよね、一年に一回くらい。私たちはゆうあい公社に対しての理念ていうお勉強会があった、今はそれはもう全然もうないですね。研修会みたいなね。そういうの今もう何かそれをする時間がない。

・そういうものをある程度知ったりとかしないと、何でこんなことするの、何

でこんなことするの。そっちだけの世界。（お金だけの世界じゃなくて）そうじゃなくて、最初から求めてた流れの中の、有償ボランティアの先輩たちの精神を受け継いでいくってことを、それは絶対に受け継いでいってもらいたいと思うもんねえ。それは公社が入ってたら、そこでやはり面接の時に、ある程度伝えるっていうことが大切。今は、何曜日と何曜日大丈夫ですか、お金はいくらですとか、そういうことだけ。それだけで終わりと思っちゃうもんね。それ以上に必要なことだと思うんですよね。

・今まであの築いてくれたものっていうのと、公社との関係が私分からない。

（中堅）

・最初にはじめたのが全くボランティアでしかもお弁当代100円払ってお年寄り皆さんと一緒に食べて、それでゆうあい福祉公社へきて、有償だったのですごく抵抗があったんですね、最初は。人間て流されちゃうんですよね、何だか今は、慣れてしまいました。

・有償っていうのでものすごく私はびっくりしたんですよ、ある人と入った時にね。そしたら、そうしないといい人が集まらないからって。

3）協力員のボランティア精神が薄くなっている現状—協力員の有償ボランティアに対する考え方の変化

最近は、時間がオーバーすると「時給に換算しない？」という言葉や、働く場としてパート扱いのような考え方の協力員が増えてきていることを指摘している。ベテランはボランティア精神の強い方が多く、中堅から新人にかけてその精神が薄れてきている現状があるということが述べられた。

参加時期により、協力員の考え方が変わってきていること、ボランティア意識がなければ行事への参加は重荷という意見もあり、ボランティア精神の希薄化が述べられた。

・協力会員の考え方が、ある時期からほとんど違うと思うんです。層が違ってきたと思うんですよね。年齢とかでなくて、入った時点で私は層が違うと思います。割とこういう方たちは、ボランティア精神で入っているけども、もう私たちぐらいになってしまうと、大体、誘われて、私は誘われて入ってきたんですね。でも、やっぱりこう誘い方が微妙にもうパート扱いなんですよ。800円っていい値段なんですよね。

・前はね、夏祭りっていうのもあったんですよ。だから、いつごろからやんなくなったのよね。お庭を開放して、たこ焼き作ったりね、盆踊りしたり、夜。

・結構、賄えなくなっちゃったんじゃないですか？ボランティアでなければ、行事や色んなことに関して、しょっちゅうしょっちゅう出なくちゃいけないってことは重荷になってくると思うんですよね。そういう声が結構、出てきて、それから随分、こう切られていったような気がする。まだ、私たちのときには、やってましたよね。だから、そういう関わり合いがもう年々減ってきてる。

・やっぱり仲良くなるんですけどね。それがないですからねまぁ、ちょっと難しいですね、今からは。と思います、

私は。誰かがもう音頭とってやらないと。
・有償がついていてもボランティア。してあげるのではなく、させていただく。今は働く場になってきている。時間がオーバーすると「時間に換算しない？」というようになる。
・パート扱いではないけれども、微妙にそういう考え方で入ってきてるかなって。わからないですよ、人の心の中はわからないけども、もう本当に違うなって思いますよ。うーん、だから、やっぱり余分なものは出たくないみたいな感覚があるし、そこら辺かなっていう。大きなお世話って言うのも必要じゃないですか。ちょっとだけね、いっぱいはいらないですけども。

6．引き継いでいく理念とは何か

利用者のことを考え、自分たちが老いたときに利用できるような、自分も食べたいと思える食事を作り続けること、有償がついていてもボランティアであり、先輩方が続けてきたこと、その思いを大切に引き継いでいくことが重要であるということが述べられた。また、安心で安全なものを提供するためには、緊張感と覚悟が必要であるということを、開設当初の協力員、ベテランが述べている。

・出汁はね、お昆布とあの一煮干しとおみそ汁はおすましは、お昆布とかつお節でとって、化学調味料全然使ってないのよって言うんですね。「どうりでおいしいわ」って言ってね。

・会則の「和」と「輪」。「わ」を崩さないようにしないといけない。
・誇りとして思うのは、やはりあの小人数の中で、5人ですよね。5人の中で100とか90とか作るのよ。（よくやれるなぁ）全部手でね。あれは本当にすごいなって思いますよね。どこでも出来ない感じですよね。それでおいしくてあんなに気を遣って、髪の毛入らないようにゴミ入らないようにっていう感じ。でもよく皆さんね、ずっと10年も20年もやってきたと思いますね。感謝しちゃいますよね。だから自分が安心してお弁当取れるんじゃないかなと思います。
・誇りに思うことは食数が増えると取って下さる方が多くなってきたのかなとか思ったり。それが嬉しいのとやはりあの町走ってても、お仲間ランナーさんの車を見かけると「あっ、ここにも走ってるんだなあ、私たちの作ってたものが。」とかそういうのすごく思いますね。私たちも安心して老後を送れるなって。
・大切にしているってことは「安全で安心な物をお届けする」っていうことで、作る時はとても緊張しますね。だけどもそこへ行くまでは、すごく人の輪っていうかみんなで作るって。
・人が続いていくことが、このゆうあいの先輩が作ったものが続いていくってことですね。
・先輩方の理念とは、利用者のことを考えてやっていくことが大切
・10年記念誌を作った時に、最初の時のお仲間ランナーが出来たっていうことが書いてあるんですけど、もう今伝

わってきてないっていうかね、どっかで終わっちゃってるっていうかね。もったいないです。

・利用者さんのことを考えて、あの一やっていくっていうのがまず大切

・私たちが、あの一この町に住んでて、あの自分が体が弱った時に、安心してね、であの一、どうしようどうしようってなりますよね、もし自分が作れなくなったり、周りに頼る人もいなかったりすると。その時に、あっゆうあい福祉公社ってところではちゃんと栄養もかん考えてくれて、あの届けてくれて安否確認もしてくれて、あの一お食事を届けてくれるところがあるんだ。私たちはそこがもしあるんだったらば、そこを利用しようじゃないか、私たちが作って今食べて、あの作ったものをですね、私たちも食べて試食してみますよね。あっこういうものだったら私たちも安心して食べれるんだ、私も取ってみようっていう、まずその気持ちを大切に、作りましょうっていう気持ちだったんですね。自分が老いたときに、自分も利用ができるっていう、そのためには今の方たちにもあのちゃんとしたもの提供しましょう、自分も将来行く道ですよね、これから行く道を、大切にしよう、という考えがすごくあったと思うんですね。それで何か今は何か、本当に働く場になってると思うんですね。時間がオーバーすると、何かもう時間に換算しない？とかそんなになってきてるところもあるから、そういうものじゃないと思うんですね。あのボランティア、有償がついてもボランティアだと思うんですね。ボランティアってのはしてあげるんじゃなくて、させて頂くだと思うんですね私なんかは。あ一その気持ちが何かなくなってきてるとすごく思うんですね。

・異物混入があった時に、すごくこういうことはない訳ではない訳ですよね、色々な所で。だけどそういう時にすごいショックがありまして、最初の時に。「もう自分があれだとかじゃないでしょう、あなたのって分かった訳ではないでしょう」って言われても、どうもその異物が入っていくっていうことが、作っていく時に、利用者さんに行く時に大変なことになるので、あぁすごいとこに私仕事しちゃってて、ちょっと恐れをなしちゃったんですね。「怖くて」何かすごいそういう時に体調を崩すくらい、あっ怖い仕事をしているんだっていうことが・・・有償ボランティアでお金を頂く、だけどこれはお仕事と同じようなことで、利用者さんの口の中に入るものってことから、倍増、緊張感が走りましてそれは色々工夫されて公社の方にもみんなで買いに行って、色々そういうことがないようにゴミを取ったりとかね、衣類に粘着テープでやったりとかそういうこと色々心がけて頑張っているんでしょうけど、やはり常にあることだなと思って、それはすごく未だに私の課題と言ったら変ですけども、緊張があるところです。

・公社が移転してきてあそこの国領に調理場が出来た時に、あの一プラスあの一人がたくさんいるっていうことで、地域センターでやってた人たちが入

ったんですよね。それで食数も増えるということで、配達の助手してたけど「週１回ぐらい調理入らない」って言われて入ったんですけど、あの一地域センターでやってた方もベテランさんだから、その付いていくって感じで、そこでもういきなり 100 食で時間も・・・。だからちょっと余裕があったんですよね。それで午前中もお弁当持ちで行ったんですよね。終わった後にみんなで自分たちのお弁当食べながら、試食の分も、試食しながら自分たちでお昼ご飯を持って行って、そこで最後のミーティングをしてたんですよ。

７．その他—厨房改修・弁当箱の変更後の対応（効率の良し悪し）について

（１）調理場での課題

効率よくお弁当を仕上げるための課題として、冷やす手順や調理器具の使い方についての問題、お弁当箱の問題などがあげられた。

・結局、読めるか読めないかだと私思いますけどね。こうやったら、早く冷えるってことをそのときに、即座に判断できなければ、鍋の方が早いって言ったら、鍋ごと突っ込んじゃえばいいわけですよ。でも、それをいちいち聞いてれば、その暇もかかってきちゃうし。現場の判断がいかに、適切かによって凄く効率よくなられてるわけなんですよね。冷やした後に、どう動くかっていうふうに、考えていかないといかない。

・ご飯が中に入るようになったから、凄く効率が悪い。

・お弁当の汁のふたが問題で、改良されたんですけど、もの凄いこぼれたり、何か散々だったんですね、この 1，2 か月。それで、苦情はもちろんあったんですけども。その一お魚（冷やすことで固くなる）の件でまだ、まだっていうか。

・焦げ目がなかなかつかなくて生っぽく見えた状態のときが多々あったんですね。今は、焦げ目がついて、魚らしいお魚になった。

・いいとこ悪いとこだよね。チラー（瞬間冷却機）が入って、以前はおみそ汁とか、成るべく、あったかめと思いましたけど、今は、どうせ冷やすんですよ。25 度で。時間も朝一番で作ってしまうと、他のがこう手をまわしていけるから、やっぱり、いいとこ悪いとこ。

・回転釜が２つになってよかったかなって思います。こっちでお味噌汁作って、こっちで茹で物が出来るから。

・どういう順番で冷やすかとかそういう問題もありますよね。全部が全部、冷やせないみたいです。時間的な問題で。冷やすか冷やさないとかいつも絶えず、言ってますね。

・ケース・バイ・ケースで、そのものをどうするかっていう時間との戦いじゃないですけども。

（２）利用者視点で考えた際の課題—お弁当を冷やして渡すことについて

食品衛生上、お弁当を冷やしてお届けすることになり、電子レンジの使えない方への対応についての意見があげ

られた。おいしく愛情込めて作ったお弁当を、あたたかく食べてほしいという思いから、どのようにしたらよいか、公社の「ちょこっとサービス」を併用していただく、「ヘルパーと併用できないか」などの意見が述べられた。

・電子レンジが使えないっておっしゃるの。「家内がいると、出来るんだけどね、出来ないんだよー」って。
・お魚なんか、冷めちゃうから、やっぱり、ものによっては堅く、さわらなんか凄く堅くなるのよ。
・お肉だって、すっかり堅くなりますよ。
・「なんか堅いねー」とかって言われるとね、冷やすから。
・なかなかレンジは使えないですね。入り立てぐらいだったら、まだお元気なんだけども。いくらうちなんか教えても、やっぱり無理みたいで、「ちょっとふたをずらして、チンすればいいんですよ」って言っても、何か、そんな雰囲気じゃないです。
・課題の一つとしては、今あの、お弁当の容器があの変わりましたねえ、あの電子レンジに入れられるような。で食事の衛生上、冷やすようにしてますけれども、ただ問題なのは、あの一昼間一人でお留守番しているお年寄りが電子レンジを使えないような方もいらっしゃって、味噌汁冷たいの出すのすっごい気が引けるんです。忙しく冷やして行くんですが、食品衛生上、やむを得ずやってることなんですけど、あのへんどうにかー、容器が一良い物がないかなとか思うんですけど。前のは確かに飲みにくかったんですよね、分厚くって、あの病院で点数取れる給食やってる時の容器でしたから、今は、完全に冷やしてから、もう持つと冷たいんです。それをそのまま飲んで下さいって置いてくるのがね、ものすごく気が引けるんですね。それと、豚肉の使ったもののお料理がもう完全に白くなって召し上がると美味しくないんじゃないかなと思いつつ、しょうがなく置いてきますけれども、全部、全部の方が電子レンジにいちいち入れて、食べられるかどうかっていうのが、お届けしてて、いつといつお弁当来るんですか、お嫁さんが頼んだんですけど分かんないんです、っていうようなお宅もあるんですから、たぶん電子レンジをお使いにならないと思うんですね。
・時間がない、遅くなると後の人がお腹空かせて待ってるから。だからね、ちょっとね、いらないって言われるから味噌汁下げてくるお宅もあるんですね。もう冷たいっていうの分かってんですけれども、そのへんがどうにか良い方法がないかなっていうのが、一つ私から。難しいですよね、食品衛生上は今のやり方がベターだけれども。
・だからやっぱり、食べていらっしゃる方との面接っていうのが作るほうの側が、やっぱりね、食事を完全に・・・自分たちで作ってる人じゃないとそこまでね気持ちって乗ってこないんだと思うんですねえ。あの、愛情込めて作ってますから、愛情。違いますからね。
・テーブルにきちっとセットして、ふたを開けておくお宅もある

・テーブルセットのときにレンジもかけてあげるとかできないのかな。
・ちょこっとさんってあるじゃないですか、あの今、公社に。そういうの使ってもらうとそうすると「見守る」とか、ああいうのでそこの近所の人で登録してる人にその、ちょっと食事の 30 分に行ってもらうとか、そういう利用の仕方って出来ないのかしら。それが、公社のあり方だと思うのよね。そういうのが何かあればね、いいですよね。今すごいそれ感じてんですよ。
・私はただね、直接いつもお届けしてて、実際お弁当詰めたり箱入れながら、あーせっかくおいしいのに残念だなあと思いながらね、やってるんですね。ワーカーさんもね、どこまで関与してるんでしょうかね。

D. 考察

1. 調理協力員の活動の意味

福祉公社の住民参加による活動の効果は、以下の７点である。

（1） お弁当を楽しみに待っていてくれる利用者のために、活動を続けられるよう、自分の健康を維持するよう心がけるようになる。利用する側、提供する側（協力員）ともに健康になる。

（2） 外出できずお弁当で生活を維持している利用者の安否確認とともに、安心して食べられるバランスのとれた栄養のあるおいしい食事が健康な在宅生活を支え、利用者が「命をいただく」と同時に、協力員は「人に命を与えている」という意識が生まれる。

（3） 利用者とのコミュニケーションを通して、楽しみややりがいを感じることができる。

（4） 配達時に自宅で倒れている利用者を助けた経験により、孤独死予防につながる安否確認の重要性を認識し、今後も在宅生活を支えていきたいという意識が高まった。

（5） 社会参加の場として「地域で福祉のためにお手伝いができる」という自分が社会に役立つ経験と、「自分も将来利用できる」という、今後の自分の生活についても「いずれわが身」として捉えることができる。

（6） 地域における仲間との交流の場、多世代との関わりの場、人との巡り合いがある場所＝福祉公社である。

（7） 「安心で安全な食事をお届けする」ために、仲間と協力し合い、乗り越えていく達成感を味わうことができる。

2. 協力員が活動をしていて感じる課題

今後改善すべき点として以下の７点があげられた。

（1） 公社の組織、内部の連携が不十分との指摘があり、調理協力員、配達者、食事担当職員、相談員、栄養士、ヘルパー、デイサービスとの連携強化の必要性があげられた。利用者を中心にそれらが連携し循環できる組織に

するために、役割や位置づけを明確にしていく必要がある。

（2） 調理協力員と栄養士の関係から、仕入れ、在庫管理、調理、献立等の役割について明確にし、時代の変化やニーズに対応しつつ伝統として守るべきことと変えていく必要があるものについて、検討していく必要がある。

（3） 配達された食事の情報（利用者の反応）を調理へ伝えていくことが重要である。とくに食事の形態については、どこまで手をかける（刻み等の配慮）必要があるか、利用者はどのように召し上がっているかなど、作り手に伝えていく必要がある。

（4） 協力員は、「公社の考えが伝わってこない」ということから、食事サービスの今後の位置づけについて、これからどのように対応し提供していくか、公社の今後のビジョンについて協力員とともに共有し検討していく必要がある。

（5） ボランティア精神の希薄化が問題となり、有償ボランティアの意味、位置づけについて、公社の理念を勉強する研修会が以前より少なくなったということから、今後も公社の理念を伝えるための研修会の必要性があげられた。有償ボランティアを築いてきた精神を伝えていくことが重要である。

（6） お弁当の価格の検討から、時給を減らさずに調理者の人数を減らしたことによって仲間同士のコミュニケーションをとるゆとりがなくなったことが課題となっている。チームワークが上手くいくようにするために、コミュニケーションをとるゆとりの確保の必要性があげられた。

（7） 新人は現在の新人研修だけでは覚えきれず、研修終了後もフォローできる体制が必要である。新人への指導方法の不安があげられ、指導方法の研修の必要性やこれまで続いてきた歴史を後につなげていけるよう、担い手の確保とともに継続できるシステムの構築が重要である。

3．引き継いでいく理念

「お仲間ランナー」が大切にされている考え方として、以下の項目があげられる。

（1） 自分が老いたときに自分も利用できる。自分も将来行く道を、これから行く道を大切にしていくこと

（2） 先輩方の理念は、利用者のことを考えてやっていくこと

（3） 衛生管理、安心、安全な食事の提供

（4） 365日すべて手作り

（5） 昆布、煮干し、鰹節でだしをとる（化学調味料を使用しない）ことへの誇り

（6） 会則の「和と輪」・・「わ」を崩

さないこと

（7） 緊張感を持って作ること、覚悟が必要

（8） 食数が増えると利用者から必要とされていることを感じ、配達を見かけるとこの街で安心して老後を迎えられると思えること

（9） ゆうあいの先輩が作ったものを続けていくこと

E. 結論

住民参加型食事サービスにおける調理協力員に対するグループインタビューによる質的研究から、明らかになったことは次のような点である。

ボランティア活動を通して、人との交わり・つながりを育み、多世代交流、地域の学び、地域の再発見、ともに活動する仲間と味わう緊張感、達成感。これらの体験により育まれた仲間は、地域のネットワークを構築し、自分が老いたときに利用できるサービスの提供を考えるとともに、自分自身が地域の在宅生活を支えている意識が高まったことが示唆された。配食サービスの利用者の喜ぶ姿を知り、自分自身のやりがい、楽しみへとつながり、待っていてくれる利用者のために、活動が続けられるよう、自分自身の健康にも気を遣うようになる。

活動を通して感じる課題について、「循環できる組織」の構築が挙げられ、配食サービスの利用者を中心とした連携の必要性について、調理協力員は、配達者、食事担当職員、相談員、栄養士、ヘルパー、デイサービスなどそれぞれの役割を明確にし、伝えていくことが重要であることを示している。また、調理協力員の新人への指導方法、コミュニケーションをとるゆとりの確保などの必要性が挙げられた。

調理協力員は「おいしい食事」をおいしく、安全に食べていただくために、調理場で365日作り続けている「誇り」がある。今まで培われてきたものを引き継いでいく理念とともに、今後もこの活動が継続できるよう、様々な課題と活動の意味を示している。

F. 参考文献

1) 安梅勅江（2001）「ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法　科学的根拠に基づく質的研究法の展開」医歯薬出版株式会社

2) 安梅勅江（2003）「ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法Ⅱ／活用事例編　科学的根拠に基づく質的研究法の展開」医歯薬出版株式会社

3) 安梅勅江編著（2010）「ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法Ⅲ／論文作成編　科学的根拠に基づく質的研究法の展開」医歯薬出版株式会社

G. 研究発表

1. 論文発表　今後検討していきたい。
2. 学会発表　今後検討していきたい。

H. 知的所有権の取得状況

なし

Ⅱ　分担研究報告

第３章　単身高齢者の在宅生活を支える「食」を中心とした生活の安定化に関するプロセス

第３章　単身高齢者の在宅生活を支える「食」を中心とした生活の安定化に関するプロセス

研究代表者　　友永　美帆

桜美林大学　健康福祉学群　助手

【要旨】「単身高齢者の在宅生活を支える「食」を中心とした生活の安定化に関するプロセス」の研究における質的研究から、明らかになったことは次のような点である。

まず、配食サービスを利用する単身高齢者は、自宅で生活を送り続けたいという思いが強く、「食」中心の生活を組み立てることにより、【生活の安定化】が図られているということである。【生活の安定化】の要素としては、≪配食サービス利用の安心感≫≪心の支え≫≪健康への気遣い≫≪いざという時の備え≫で構成される。配食サービスを利用し、「食」を中心とした生活を組み立てることにより、生活のリズムができ、健康的な生活が送れるようになる。また、おいしい食事は生きる楽しみになり、定期的に訪れる配達者との会話、安否確認や体調不良時における迅速な対応など、配食サービスの利用に伴う安心感が多く存在する。また、単身高齢者が在宅生活を送る上で≪心の支え≫となる、家族の存在やご近所力、在宅サービスの利用、社会とのつながりが、自分も元気に頑張って生きていこうという活力になっている。現在の生活を維持するために≪健康への気遣い≫をし、自分の身を守るために≪いざという時の備え≫がある。配食サービスを利用する単身高齢者は、必要な要因を主体的に組み立て、安定した生活が送れるようコーディネートし、それらは、様々な裏サポーターによる連携や活用により在宅生活を可能にさせている。

単身高齢者は在宅生活をなんとか維持しているが、その背景には、自宅においてほとんどの時間を一人で過ごし、その多くは持病を抱え、【不安だらけの生活】を送っているということである。不安の要素は、≪健康状態からくる不安感≫≪老いへの葛藤≫≪死を意識しながらの生活≫≪会話のない孤独感≫≪どうなるかわからない不安感≫で構成される。老いていく自分と向き合い、会話のない孤独を感じ、死を意識し覚悟をしながらも、現在の在宅生活を維持し継続していきたいという思いがある。このようなプロセスをたどり、単身高齢者は、【不安だらけの生活】から安心感を求め、「食」を中心に生活を組み立てることにより、健康を維持し、【生活の安定化】が図られる。

A．研究目的

本研究は、次の２つの目的をもって行われた。

一つは、単身高齢者が健康的に在宅生活を維持・継続するためには、どのような要素が必要になるかという視点である。「食」が、生命を維持するための根源的なニーズであり、栄養バランスのとれたおいしい食事が健康的な在宅生活を維持できることは言うまでもない。高齢者のみの世帯が増え

る中、配食サービスは地域の見守りや安否確認が期待できるサービスとして注目されており、安心して在宅生活を送るために必要な支援である。その安心した在宅生活を獲得するための背景要因として、単身高齢者が抱える「不安」が存在する。単身高齢者は、地域で生活する上で、様々な不安を抱えている。内閣府による「高齢者の日常生活に関する意識調査」(平成21年調査：文献3))では、日常生活に不安を感じている人が増えていること、その要因の多くは、健康や病気のことであること、また、日頃の食生活において、単身世帯及び経済的にゆとりが少ない人ほど欠食していることが明らかになった。単身高齢者が主体的に生活をコーディネートできる人とそうでない人の姿が想定される。単身高齢者の在宅生活の安定化に関するプロセスを質的に分析することで、健康的に生活を維持するには、どのような要素が重要であるのか、配食サービスを利用している利用者を対象に、生活を維持するメカニズムの一端を明らかにしたいと考えた。

二つめは、住民参加型食事サービスが、利用者にとってどのような意味や効果をもたらしているかを明らかにするという点である。住民相互の支え合い活動である住民参加型食事サービスを通して、利用者の健康と栄養の確保、定期的に地域の配達者と接する効果について、明らかにする。

B. 研究方法

住民参加型食事サービスを 20 年以上行ってきているA福祉公社において、配食サービスを利用している利用者 10 名に、半構造化面接による聞き取り調査を行った。A福祉公社では、会員制組織によって住民参加型食事サービスにおける配食サービスを長年にわたり育成支援し、365 日 1 日 2 食の食事を提供している。基本的に手渡しで配達する。対象者の年齢は 79 歳〜93 歳、家族構成は、単身世帯 10 名(うち日中独居 1 名含む)、利用歴は、4 年から 13 年の間(一時中断含む)である(表 1)。分析方法は、木下康仁による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる質的分析手法を用いた。

調査期間は 2 月 15 日〜3 月 15 日を予定していたが、東北大震災による計画停電等の影響をうけ 4 月 10 日まで延長された。

表1 調査対象者の基本属性

No.	対象者	性別	年齢	家族形態(居住年数)	既往歴	介護状況	食事サービスの利用回数	利用状況
1	A	男性	89歳	独居(30年)	なし	未	毎日 1日1回(夕)	H16年〜(7年間) 一時中断あり
2	B	女性	86歳	独居(64年)	なし(高血圧)	要支援1	週2日 1回(昼)	H18年〜(5年間) 一時中断あり
3	C	女性	86歳	独居(60年)	脳梗塞	未	週5日 2回(昼・夕)	H15年〜(8年間)
4	D	女性	84歳	未婚子同居日中独居(60年)	緑内障 白内障 洞性頻脈	要支援2	週2日 1回(昼)	H12年〜(11年間)
5	E	女性	86歳	独居(50年)	左大腿骨骨折 腰部圧迫骨折 関節炎	要支援2	毎日 1回 (夕)	H19年〜(4年間) 一時中断あり
6	F	女性	92歳	独居(30年)	I型糖尿病 腰椎すべり症	要支援2	毎日 1回(夕)	H15年〜(8年間)
7	G	女性	87歳	独居(40年)	腰部圧迫骨折 肺炎	要支援2	週3日 1回(夕)	H12年〜(11年間) 一時中断あり
8	H	女性	80歳	独居(30年)	糖尿病 広範囲脊柱管狭窄症	要支援2	週3日 1回(昼)	H14年〜(9年間) 一時中断あり
9	I	女性	79歳	独居(20年)(生活保護受給)	心臓病 左手の骨折(若い頃に首骨折)	要介護3	週4日 1回(夕)	H18年〜(5年間)
10	J	男性	93歳	独居(50年)	前立腺がん 肺炎	要支援2	週6日 1回(夕)	H10年〜(13年間)

(倫理面での配慮)

桜美林大学の倫理委員会での承認を得た方法と調査票を用いて、調査を行った。

C. 結果

結果は、カテゴリー関連図(図−1)のとおりである。生活の安定化を図るための中心層に、「食中心の生活の組み立て」というコアカテゴリーがある。つまり、単身高

齢者は現在の生活を維持できるよう、必要な要因を主体的に組み立て、安定した生活が送れるよう、コーディネートしているということである。それらは、様々な裏サポーターによる連携や活用により在宅生活を可能にさせている。

単身高齢者は、在宅生活をなんとか維持しているが、その背景には、自宅においてほとんどの時間を一人で過ごし、その多くは持病を抱え、一人暮らしにおける様々な不安を抱えながら、生活を送っているということである。単身高齢者は、在宅生活における不安の要素を解消するための創意工夫をし、食中心の生活リズムの確保、生活の組み立てにより生活の安定化を図ろうとしていることが示されている。

表 2 に示されるように、2 つの次元と 9 つのカテゴリー、29 の概念で構成される。2 つの次元の 1 つは【生活の安定化】であり、どのようにして単身高齢者が安心した在宅生活を維持するかを明らかにしている。2 つめは、背景要因である【不安だらけの生活】であり、単身高齢者の在宅生活における不安の要素を示している。

以下、抽出された概念とカテゴリーの生成に従って記述する。１．～２．は次元、『　』はコアカテゴリー、≪　≫はカテゴリー、＜　＞は概念、「　」は、高齢者の語りを表す。

１．生活の安定化 の次元

生活の安定化では、4 つのカテゴリー≪配食サービス利用の安心感≫、≪心の支え≫、≪健康への気遣い≫、≪いざという時の備え≫から構成される。

在宅生活が困難な状況に陥った時、生きていくためにはまず「食」を確保する必要がある。食事を作ることも困難な状況になり、配食サービスを利用することになるが、配食サービスには「食」の確保だけでなく、≪配食サービス利用の安心感≫へとつながっていく。最初のきっかけとなる配食サービスを利用する状況とはどのような状況だったのか、＜利用の背景＞について、「大腿骨の骨折をしてから。それまでは、だって一人でお使いもできますし、急に転んで骨折したんですね。その日も買い物の帰りに骨折したの。だから、その前にはどこにもお世話にならなくて、自分で買い物も全部できていました」「最初、具合い悪くて、圧迫骨折で、群馬県のほうの病院へ半年入っていたんです。それからうちへ帰ってきたの。それから公社さんが来てくれて、いろいろとお掃除やら何やらで始まったわけ」「(主人が) 悪性リンパ腫だったんです。でもそれが治って、そのあと転びました。それで脳挫傷で、1 回目の退院のときから (公社に) お世話になりました」「公社は最初は、家内が亡くなってからだね」「2 人暮らしのうちの 1 人がおかしくなっちゃったもんだから、食事を頼むようにして、それでお昼と夜両方とも頼み始めたのが最初」と語る。利用の背景には、自分自身の怪我や病気による入院がきっかけとなり、退院後、在宅生活において食事作りの一連の動作（買い物、食事の支度、洗いものなど）が困難な状況になる。また、配偶者の介護や死により、利用を始めている。

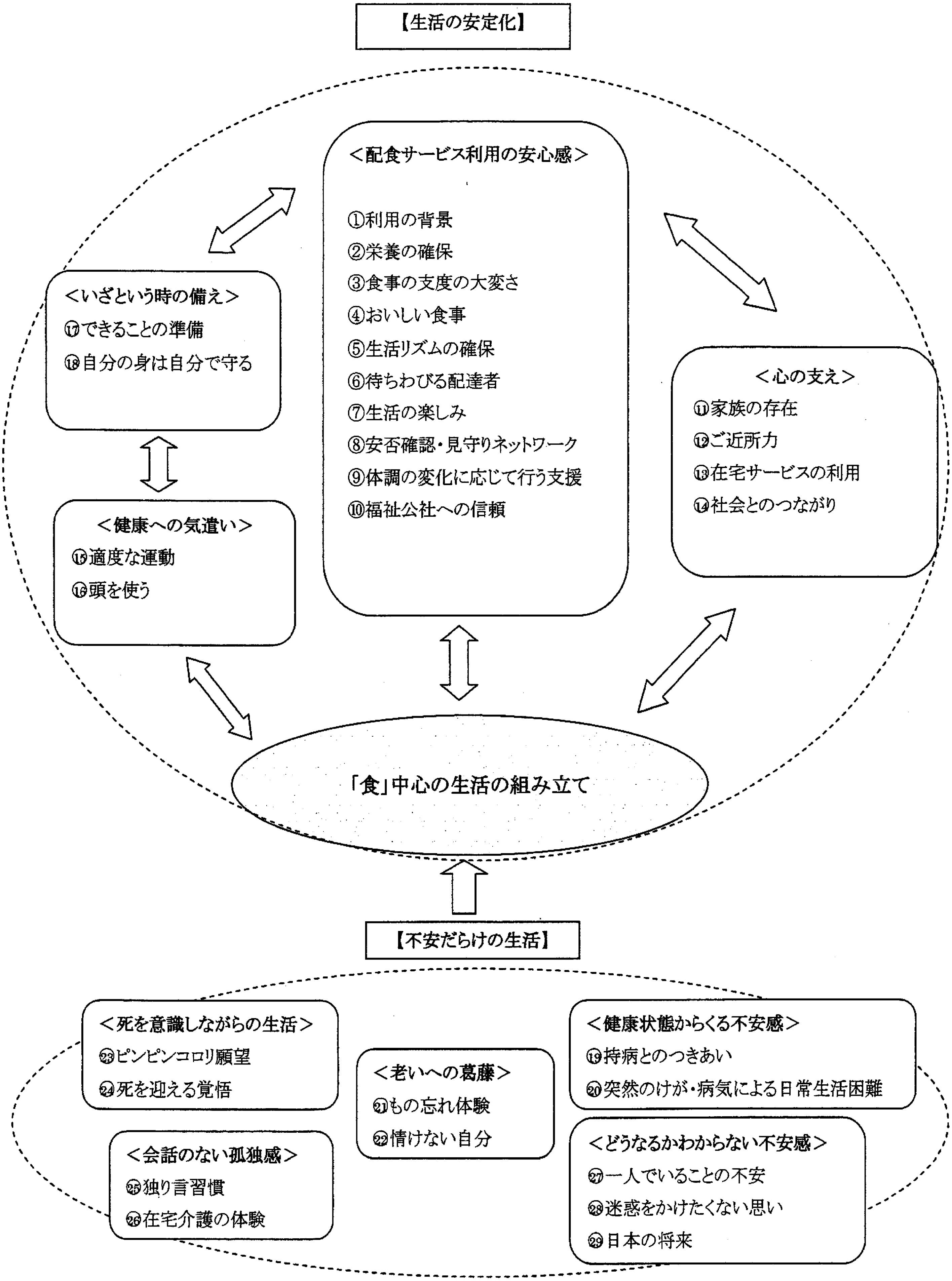
「やはり一食でもなんていうの、管理されているものをいただいたほうが、栄養的にもバランスとれるかなと思って、自分で食べていると、どうしても好きなものだけ

表2　概念・カテゴリー一覧

【生活の安定化】
＜配食サービス利用の安心感＞
①利用の背景＝自分自身の怪我や病気による入院、食事作りの一連の動作が困難な状況や妻の他界、配偶者の介護による食事管理。
②栄養の確保＝健康への気遣い、栄養バランス、栄養価の高い食事をとることで元気になる。健康な身体作り。
③食事の支度の大変さ＝3食の食事作り（食事の支度、洗いものなど）だけで終わってしまい、他に何もできなくなってしまう大変さ。
④おいしい食事＝冷凍食品を使わずにすべて手作りで安心して食べられる家庭の味。おいしい食事の楽しみ、取り続けたいと思うお弁当。
⑤生活リズムの確保＝配食サービス利用により、食事の時間が決められていること、定期的に届くことで毎日の生活リズムができ、主体的に１週間の生活の組み立てを行う行為。配食サービスが生活の息抜きにもなるということ。
⑥待ちわびる配達者＝配達者とのコミュニケーションの楽しみ、配達者の言葉で元気をもらう。いろいろな配達者がいることで、日々の想像や楽しみにつながり、慣れ親しんだ配達者に対しては、頼みごとをしやすい。
⑦生活の楽しみ＝配達されるお弁当、おいしい食事が唯一の楽しみであるということ。
⑧安否確認・見守りネットワーク＝安否確認による利用者の安心感、留守時の対応、アフターケアによる安心というお弁当だけではない安心感を得られるということ
⑨体調の変化に応じて行う支援＝利用者の体調の変化に配達者が気づくことにより、生活を総合的に支えるシステムがあるということ
⑩福祉公社への信頼＝お弁当の質、衛生面、安心して食べられるということ、日々の対応による信頼と「公」への信頼感。
＜心の支え＞
⑪家族の存在＝家族に会うことは楽しみであり、頼りにする存在であるということ
⑫ご近所力＝ご近所との関係は培ってきたものであり、自分が何かあったときには助けてくれる存在であるということ
⑬在宅サービスの利用＝定期的に来てくれるヘルパーを心待ちにし、在宅サービスによって生活が楽になるということ、話ができる相手がいることに感謝している。
⑭社会とのつながり＝社会とのつながりがあることで元気になり、自分が頑張って生きていることが他人の手本になり、役にたつと感じること。
＜健康への気遣い＞
⑮適度な運動＝歩くこと、意識的に身体を動かすことによって寝たきりを予防し、健康な身体を維持しようとしている。
⑯頭を使う＝健康な身体を維持する努力とともに認知症にならないように頭を使うようにしている。
＜いざという時の備え＞
⑰できることの準備＝緊急の事態に備え、緊急時の通報システムの設置や、自分にできることを事前に準備しておくということ。
⑱自分の身は自分で守る＝戦争体験や過去の体験から学んだ知恵、いざという時自分の身は自分の責任で守れるよう、そのための準備と覚悟が必要ということ。

【不安だらけの生活】
＜健康状態からくる不安感＞
⑲持病とのつきあい＝抱えている持病、死ぬまで続く治療、病気からくる健康状態の不安を抱えながら在宅生活を維持したいという思い。
⑳突然のけが・病気による日常生活困難＝けがや病気により、一人での日常生活が困難になってしまう状況。
＜老いへの葛藤＞
㉑もの忘れ体験＝急に思い出せなくなる体験や物忘れ体験により、認知症への不安を抱えていること。
㉒情けない自分＝老いとともに今まで出来ていたことが出来なくなっていく自分を情けないと感じること。
＜死を意識しながらの生活＞
㉓ピンピンコロリ願望＝死ぬ時は苦しまずに楽に死にたいという、自分の死に方に対する思い。
㉔死を迎える覚悟＝最期をどのように迎えるかを意識し、自分の納得のいくように準備と覚悟をしておくということ。
＜会話のない孤独感＞
㉕独り言習慣＝親しい友人や昔からの会話をする相手が亡くなり、独り言が増え、１人という孤独感が深まるということ。
㉖在宅介護の体験＝在宅介護の休む暇もないつらい状況により、会話がなくなってしまうということ。
＜どうなるかわからない不安感＞
㉗一人でいることの不安＝単身高齢者の在宅生活は狙われやすい状況があり、被害にあった経験や１人でいることの不安があるということ。
㉘迷惑をかけたくない思い＝子どもや家族の重荷にならないよう、迷惑をかけないように気を遣っているということ。
㉙日本の将来＝自分のためだけでなく、子孫や将来のために、日本の行く末を心配しているということ。

※表記は、【　】は次元、＜　＞はカテゴリー、①～㉙は概念、＝は概念の定義を表す。



図－1. 単身高齢者の在宅生活を支える「食」中心の生活の安定化全体図